

理事長所信

鈴木浩正

【はじめに】

青年会議所の会員は、まっすぐな心で行動する青年であるべきだ。そして、地域に変革をもたらすには、青年が、脈々と受け継がれた「志」を胸に、新しい日本人として、連綿と現在まで受け継がれた「勇気と情熱」をもって地域に尽くすことが必要だ。

私は、奉仕の心と、そこから得る喜びを、この青年会議所の活動で学んだ。地域への熱い思いが、行動が、そして情熱が、このまちを大きく変えていくと信じる。人は不合理で非論理、利己的である。目的を達成しようとする時、様々な人に出会い学ぶことが出来る。人に心から尽くし、地域から必要とされ社会的信頼のある団体が、青年会議所である。我々は、誠実にやり遂げる勇気が必要だ。なぜなら、我々の姿勢が、今まさに地域のひとやものごとを変えていると信じているからだ。

日本の世界に誇れるものは、何かと問われた時、私は、「人」だと伝えたい。日本には世界に誇る言葉が数多くある。その言葉すべてに日本人の美しさが表れている。日本人には、人を思いやる高い精神性がある。それこそが、我々が誇りに想い伝えていかなければならない、かけがいのないものではないだろうか。青年会議所は、「志」という尊いものを教えてくれる。戦後の焼け野原を今日のように先進国として築き上げた日本人は、高度成長期やバブル崩壊などの多種多様な問題を解決し、この恵まれた現在の日本へ導いた。近年の教育や生活環境、ソーシャルネットワークの普及により「人」が変化している。今一度、この混沌とした時代背景を鑑みたとき、我々青年世代が、多くを学び、喜びを共有し、自分自身が成長して行かなければならないことを、改めて胸に抱かなければならない。

めまぐるしいスピードで進化していく新時代に合理的に価値観を摺合せ、物事にも人にも、これを受け止め、この社会の波に乗っていかなければならない。なぜなら、これから待ち受ける地域の問題を解決していくのは、我々青年世代だと考えるからだ。

価値観を超えた関係性が築ける青年会議所の運動には、学ぶことがあまりにも多い。肯定と否定を繰り返し、人として、社会人として対話議論し、歩み寄っていく、それが人を創っていくことだと信じる。様々な事業への取り組みの中で、未熟な私を、少しずつ確実に、大きな愛を持って成長させてくださったのは、青年会議所の活動と運動、そして敬愛してやまない先輩方からの御指導の賜物である。私は、青年会議所や地域の団体で一番の得るものは、地域の経験豊富な有識者の方々との対話だと心から、そう思う。言葉の意味を考え、行動し経験することによって自分が大きく成長できるのだと信じている。

新しい発想を抱き会員同志と共に成長していくことを誓い、まっすぐで、正直な青年として家庭や仕事にもコミットしていくのだ。

【 英知を経る自身の成長 】

日本人の平均寿命は80歳を超えた。人生が50年と謳われた戦国時代の青年は、10代に元服し大人として認められた。現代の青年と呼ばれる我々の世代は、果たしてすべてを伝えることのできる大人へと、成長しているであろうか。

地域に住む青年として、行政の動向を知り、政治への意識向上を図る。この地域の子育て政策、人口動向や行政の総予算、税金が何の為に何に使われているのかを知ること、社会福祉では、行政がどのような政策のもと動いているのかを知る必要がある。なぜなら、我々青年世代が地域のリーダーとして成長するのに、それは、必要不可欠な知識だと考えるからだ。現在の青年世代は、どれだけの政策を見極める資質を持っているだろうか。政では、投票や選挙のルールを教える主権者教育ではなく、政策を見極める力を身につけることが必要なのだ。公開討論会に度々たずさわること、国民である事、市民である権利を知る事の重要性を学んだ。様々な価値観が交差する政に関しては、これを否定せず強制せず、対話し議論することが、我々地域の青年としての持つべき政だと考える。

地域の未来を考える機会として市政勉強会を開催する。

【 災害における青年の担い 】

いつかの日か来る震災に備え、防災について考える。私が、青年会議所に入会し初めてがむしゃらに行動したのは、2010年に起きた小山町の台風災害支援だった。仲間の家が濁流にのまれ、喪失感が漂うその場所で行った災害支援は、今も昨日のことに思い出される。その場所にメンバーと先輩方が集まり、まるで専門家が終結したような裾野青年会議所のとった行動は、地域の青年のあるべき姿であったのではないだろうか。東日本大震災では、あまりにも大きな被害に自分たちの無力さを痛感させられた。熊本地震では、2013年に日本青年会議所に出向した際、出会った仲間が被災した。その仲間の言葉に感動した。「今は見守っていてください。出来るだけ早く熊本を素敵な場所に戻します。その時は、御家族と熊本の地へおこしてください。」泣き言はおろか、なんの要請すらなかった。熊本の現地では、日本青年会議所や現地周辺の青年会議所がボランティアセンターの一助を担い活動していたと聞く。その仲間たちから学ぶことは計り知れない。

我々、青年世代の活躍する他団体との災害時における広域連携を目的とした異業種団体交流会を実施し、共に防災について学び、いつの日か起こる災害に今から備えていくのだ。

【 チャンスにチャレンジする 】

2017年度、メンバーには対外的な部分でも多くを学んでほしい。恵まれたことに、静岡ブロック協議会の主管は、一般社団法人御殿場青年会議所である。直前理事長の鈴木大悟君が、公益社団法人日本青年会議所東海地区協議会監査担当役員を拜命し、秋山陵君が公益社団法人日本青年会議所東海地区静岡ブロック協議会副会長として出向する。この青年会議所の醍醐味と言えば出向であり、そこで得る人脈と経験がなによりも大きい自身

の宝となる。私自身も出向で学んだことは語りつくせないほど多く、私のモチベーションへの影響は絶大だ。また、多くの先輩方もその年度し出向され広域にわたり多種多様な全国各地の青年会議所の同志と出会い成長したと聞いている。百聞は一見にしかず。この近隣LOM主管のチャンスをつかみ、会員のみなにも多くを学び、活躍を期待する。

【 第20回 富士山国際雪合戦大会への思い 】

本年20回目を迎える富士山国際雪合戦は、1995年の第0回大会から多くの歴史とドラマのある、この地域の冬の大イベントだ。

この近隣地域には、地域活性化の事業として様々な催し物が多く存在する。それぞれ関係している人々が強い気概と情熱を持って参画している。だが、それに参加する人は増えているが、参画していく若者が減っていると聞く。昨今、地域での祭事に際し、人手不足が課題となっている。日本の人口が、8000万人まで減少していくと言われているなか、地方自治体も確実に青年世代が減少していく。そんな時だからこそ、青年会議所の会員は、志高く、近隣地域が手を結び子供たちの未来のために行動していくべきだと思う。人がやらない事を、率先して行動し、そこから多くを学び伝えていかなければ何事も継続していかないだろう。裾野青年会議所には、そのための英知と情熱が蓄積されている。

昨年は、3年ぶりの開催という事もあり多方面からの参加者がこの地域に集った。3000人あまりの人々が集まり、白熱した大会が執り行われたが、地域活性化を担う雪合戦大会は、この大会に携わり成長する人的部分も魅力の一つだ。

参加する選手と、そこに来る来場者のために、魅力的で迫力のある雪合戦大会を実施するのだ。富士山という財産を活かし、裾野青年会議所が作り上げたこの雪合戦大会をしっかり胸に刻み、永続的な開催に向けた移管に挑み決断する。

【 子供達への情熱と友情の伝承 】

日本一の山「霊峰富士」。富士登山は、壮大な事業だ。この地域に住む我々には、あたりまえの景観だが、他県から来る人々には「霊峰富士」は、まさに日本の象徴なのだ。

裾野青年会議所は、沖縄県の公益社団法人島尻青年会議所と友好JCとして永い月日を共有している。沖縄の地に初めて行ったのは、20人の子供達と青年会議所の青少年育成事業だった。青い海と空、夢に描いた沖縄の地がそこにはあった。

生まれて初めて富士登山を経験したのも、青年会議所の事業だった。50人あまりの近隣市町の子供達と沖縄から来た子供達、そして東日本大震災に被災した5名の子供達との富士登山は、とても印象深い。沖縄から来た同志は、富士山を観て一同声を合わせたようにこう言う「これが日本一の富士山か」と。高山病にかかり体調不良の中、最後まであきらめない精神を培い、富士山から観る景観に感動し、同じ時間を共有することにより友情が芽生える。この富士登山は、最高だ。この事業では、青年会議所の会員が驚くほど成長する。子供達のこの夏一番の思い出にするために、安心安全に登山が行えるように考え抜

き、我々に預ける保護者の方々の想いを汲み、ひと回りもふた回りも成長した児童たちをきちんと送り返すのだ。最後まであきらめない精神力を情熱を持って育み、協調性とおもいやりを子供も大人も学ぶ、そんな青少年育成事業を創造する。

【 第3回 富士山一周国際駅伝への取り組み 】

創立四十周年事業でビジョンとして掲げられた「構想富士山」から5年の歳月を経て行われた。富士山一周国際駅伝は、第二回大会も無事執り行われ、飛躍を期待される事業だ。この駅伝は、準備から大会終了まで伝えきれないほどの困難がある。そして、そこには語りきれない、涙が出るほど感動できる「一つのドラマ」がある。

中期ビジョン「SSC Dream SUSONO」のスポーツと広域連携を代表する事業として、確固たる覚悟で協賛協力関係を考察し確立する。そして、この広域連携事業の公益性を伝え、行政をはじめとする各種団体、そして、富士山会議所属LOMとの強い関係性を構築する。この駅伝の魅力を建設的な形で行政に伝え、補助金の申請に挑み、2018年の早い時期にエントリーを開始する仕組み作りに邁進していく。第3回富士山一周国際駅伝は、30チームが参加し1000人規模の大会にするため、民間企業との対話とコミュニケーションを絶えず取り合うことが必要だ。

この素晴らしい富士山一周国際駅伝の在り方を再考し、永続的な事業にしていく。

【 葦編三絶（いへんさんぜつ）の想い 】

昨今の混沌とした世の中になることを、こんなにも多くの事件や問題が起こりえることを予想していただろうか。

日本は、世界の中で平和で豊かな国だと思う。しかし、貧困家庭や介護離職者の増加、福祉に関する問題は山積みで、解決の糸口は、まだまだ見えていない。政府が様々な取り組みを行い、日本人すべての人々が健康で豊かに暮らしていける日本は、理想像だ。

報道で目にする自殺者の増加、貧困や成長段階での家庭環境などの影響が原因で起こる児童虐待は、絶対に根絶しなければならない。私自身も「親」である。凄惨な事件を報道で観るといたたまれない気持ちになる。つい、息子や娘を抱きしめてしまう。この問題に立ち向かうには、まず、正しい知識を有識者から聞くことが、解決の窓口になっていくはずだ。近隣諸国との問題や、世界中で巻き起こっているテロ事件のニュースは、私の心に悲しみと憤りの感情を掻き立てる。テロ事件による、一般人や子供の被害者の映像が目に焼き付いている。

この青年会議所で、何ができるのだろうか。きっと、何もできないだろう。

しかし、我々には青年のパワーと情熱がある。絶対にあきらめない勇気をもっている。支えてくれる家族と友人がいる。

まずは、我々が、学び話し合うことが、一歩となる。

【 活力みなぎる J C 運動の発進 】

青年会議所が元気な街は、街が元気だと聞く。46年の歴史を持つ裾野青年会議所は、その年その時期の問題を話し合い解決していった。

今、「人」の変化の過渡期だ。会員の減少に歯止めをかけるには、自らが率先して行動しなければならない。300日300件の会員拡大運動を目標とする。青年会議所の魅力を、青年の熱い情熱を持った行動が現在を変革していくことを、丁寧にじっくりと伝えていけば会員拡大は、きっと成功する。会員拡大特別委員会を定期的で開催し、ひとつの事業として年間会員一丸となって行動するのだ。

この街がにぎやかで明るい街であるために

この街の子供たちの未来が豊かであるために

公益社団法人裾野青年会議所を30名以上の団体へ会員一丸となって行動するのだ。

【 最後に 】

スティーブジョブズ氏が人生に終わりを迎えようとしているときの話に

「他の人の目には、私の人生は、成功の典型的な縮図に見えるだろう。しかし、いま思えば仕事をのぞくと、喜びが少ない人生だった。もっと大切な何かほかの事を得るべきだった。あなたの家族、パートナー、友人を丁寧に扱ってあげてください。他の人を丁寧に、大切にしてください。」

と語り残した。

青年会議所は、その大切な物を得られる団体だ

すべてに、熱くまっすぐで正直に歩いて行く

この青年会議所は、先輩たちの礎である。卒業されてからも、なお、様々な場所でリーダーとして地域を牽引している先輩方から多くを学び、自分を磨き大きく成長しよう。

もの・ことに溢れ、当たり前のように過ごしている今の生活が、とても恵まれていることを再認識し、この地域の若い世代として、絶対に最後まであきらめない精神力と行動力、そして、家族への感謝を忘れず、会社を守り、この地域に尽くすリーダーへと成長する1年にしよう。未来を創造する1年にしよう。

明るく豊かな地域を創れると信じて・・・

子供たちの未来のために・・・

この地域の未来は、青年世代にかかっている・・・